

## V. 本実証で得られた成果と課題

- 1. 夜間中学での学び直しや新たな学びの場の先進事例の創出及び課題の把握**
2. 夜間中学と関係機関等との連携についての先進事例の創出及び課題の把握
3. 夜間中学における支援を必要とする生徒等に対する周知方法の先進事例の創出

不登校状態の学齢生徒3名が夜間中学で学び、継続して登校するという、新たな学びの事例が生まれた。多様な課題を抱える学齢期の生徒にとって、生活リズムが崩れている状態でも**夕方から通える夜間中学は新たな学びの選択肢**の一つになり得る可能性を確認できた。

事業  
効果

不登校状態の生徒にとっては「**学校**」という**場所が困難な場所**である一方で、**大きな成長曲線を描ける場所**でもあることを実証

### 1. 学校内の枠組みやルールを守ることで社会生活に必要な行動の習慣化に寄与

不登校状態が長期化すると、学校で基本とされるルールを守れず多くの失敗を経験するが、何度も他の生徒の行動を見たりサポートを受けることで学校生活に必要な行動が身につき習慣化された（p.38-40）。

### 2. 不登校生徒の対人関係構築力の向上に寄与

他生徒と関わり、基本的な挨拶やクラス内で必要な会話を積むことで、人と関わりたいという人間関係の構築に対して前向きな気持ちが向上した（p.42-44）。

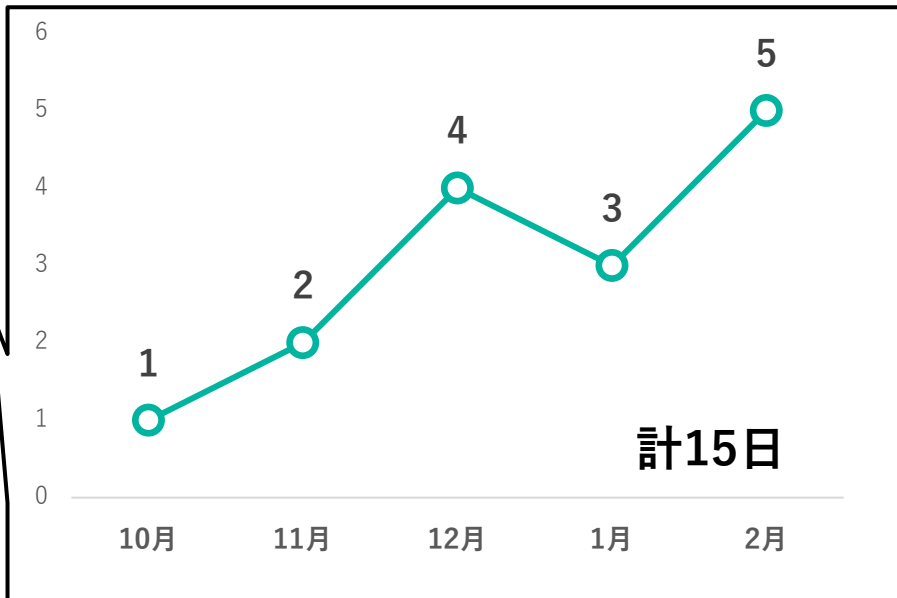
### 3. 登校することで得られる多様な機会により興味関心が広がり成長に寄与

学校内でテストを受けたり、社会科見学に参加したりするなどの機会が得られることで、生徒の興味関心の幅が広がり新たな可能性が開かれた（p.45-46）。

Aくん



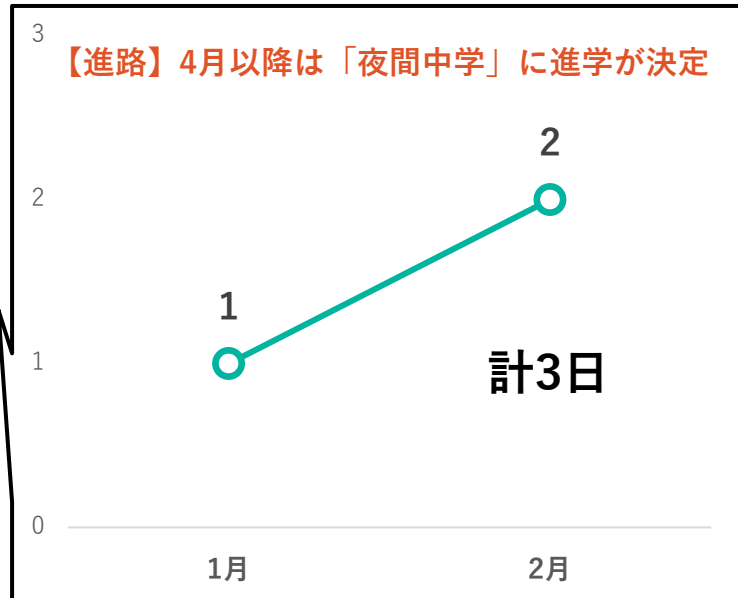
中学2年男子生徒  
令和4年10月より  
利用開始



Cさん



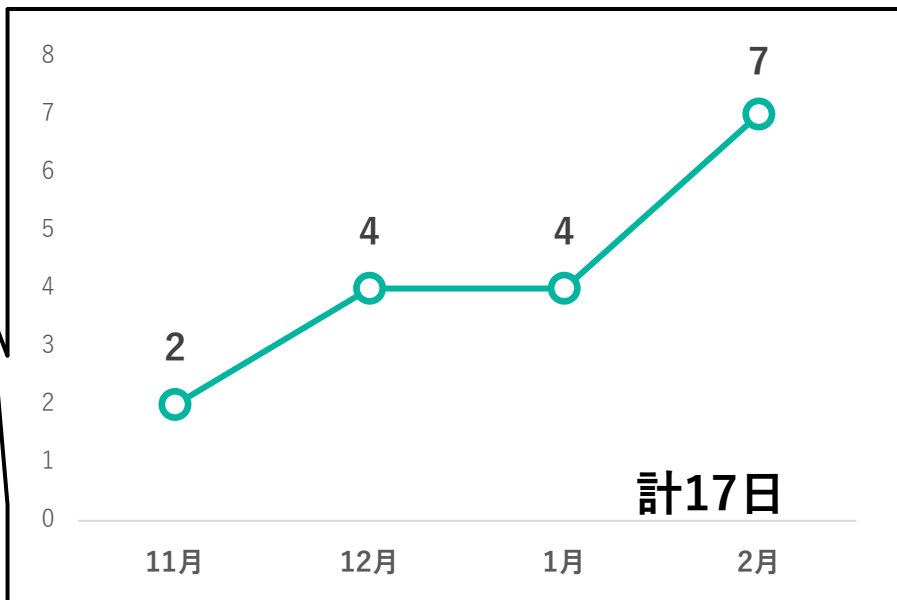
中学3年女子生徒  
令和5年1月より  
利用開始



Bくん



中学2年男子生徒  
令和4年11月より  
利用開始



Dさん



中学2年女子生徒

夜間中学の授業見学を1回実施。保護者からは利用の希望があったが、本人の意向により今回の実証実験への参加は辞退した。もともと学習意欲が強く、戻り学習よりも在籍校のクラス参加と同等のペースで勉強できる場所を必要としていた。

**【前提情報】**

中学1年次の前半から不登校。不登校状態になってからは、月に1日程度担任の先生と話すために登校していた。

個人情報のため非公表

**【夜間中学に登校後の様子や変化】**

学習への苦手意識が強かったが、文字を書くことに徐々に慣れていった。

個人情報のため非公表

Aくん



中学2年男子生徒  
令和4年10月より  
利用開始

**【前提情報】**

中学1年次の前半から不登校。不登校状態になってからは、保健室や別室などへの登校もしていない。

個人情報のため非公表

**【夜間中学に登校後の様子や変化】**

夜間中学の授業に慣れると、自ら積極的に発言するようになった。

中学入学以来、定期考査などを受けたことがなかったが、夜間中学のテストの準備をするようになり、高校進学に対して意欲的な発言が増え、学ぶことが楽しいという主旨の発言を支援計画コーディネーターに話すようになった。

個人情報のため非公表

Bくん



中学2年男子生徒  
令和4年11月より  
利用開始

Cさん

中学3年女子生徒  
令和5年1月より  
利用開始**【前提情報】**

個人情報のため非公表

**【夜間中学に登校後の様子】**

教科によって理解度のバラつきはあるが、中でも英語と技術については中学1年次の範囲はほぼすべて理解しており、夜間中学の先生にも褒められた。

声は小さいが、得意な英語では全体の前で発表もでき、他の生徒から声をかけられるとしっかりと返事ができる様子が見受けられた。

- ・ 中学卒業後は学び直しのために夜間中学への進学を予定している。

個人情報のため非公表

支援コーディネーターの伴走によって  
記入したプリント▶

夜間中学に登校したことで**生徒本人にポジティブな影響**をもたらしているかなどを確認するために効果測定を実施した。

菊池章夫. (2004). Kiss-18研究ノート.  
岩手県立大学社会福祉学部紀要、2、41-51.

他者から肯定的な反応をもらい、否定的な反応をもらわないように作用するスキル

### 【初歩的なスキル】

- ・他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか
- ・知らない人でもすぐに会話が始められますか
- ・初めて会う人に自己紹介が上手にできますか

### 【高度なスキル】

- ・他人にやってもらいたいことを、うまく伝えることができますか
- ・他人が話しているところに、気軽に参加できますか
- ・自分が何か失敗したとき、相手にすぐに謝ることができますか

### 【感情処理スキル】

- ・あなたは、相手があなたに対して怒っているときに、うまく落ち着いてもらうことができますか
- ・嫌なことや、つらいと感じたときに、気持ちをうまく整理できますか
- ・自分の考えや気持ちを、相手に伝えることができますか

「5. いつもそうだ」～「1. いつもそうではない」の5件法で測定

桜井茂男. (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. 筑波大学発達臨床心理学研究、12、65-71.

他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく、自身で自己への尊重や価値を評価する感覚

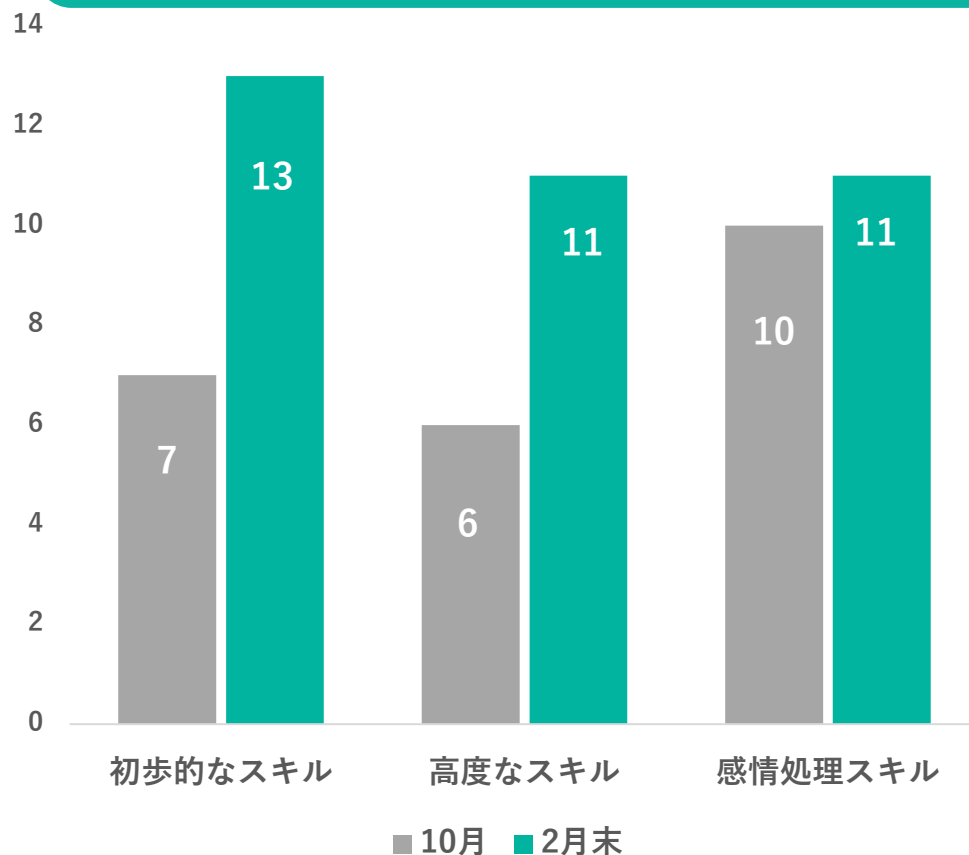
- ・私は自分に満足している
- ・私は自分がだめな人間だと思う
- ・私は自分には見どころがあると思う
- ・私はたいていの人がやれる程度には物事ができる
- ・私には得意に思うことがない
- ・私は自分が役立たずだと感じる
- ・私は自分がすくなくとも他人とおなじくらいの価値のある人間だと思う
- ・もう少し自分を尊敬できたらと思う
- ・自分を失敗者だと思いがちである
- ・私は自分に対して、前向きな態度をとっている

「4. はい」～「1. いいえ」の4件法で測定

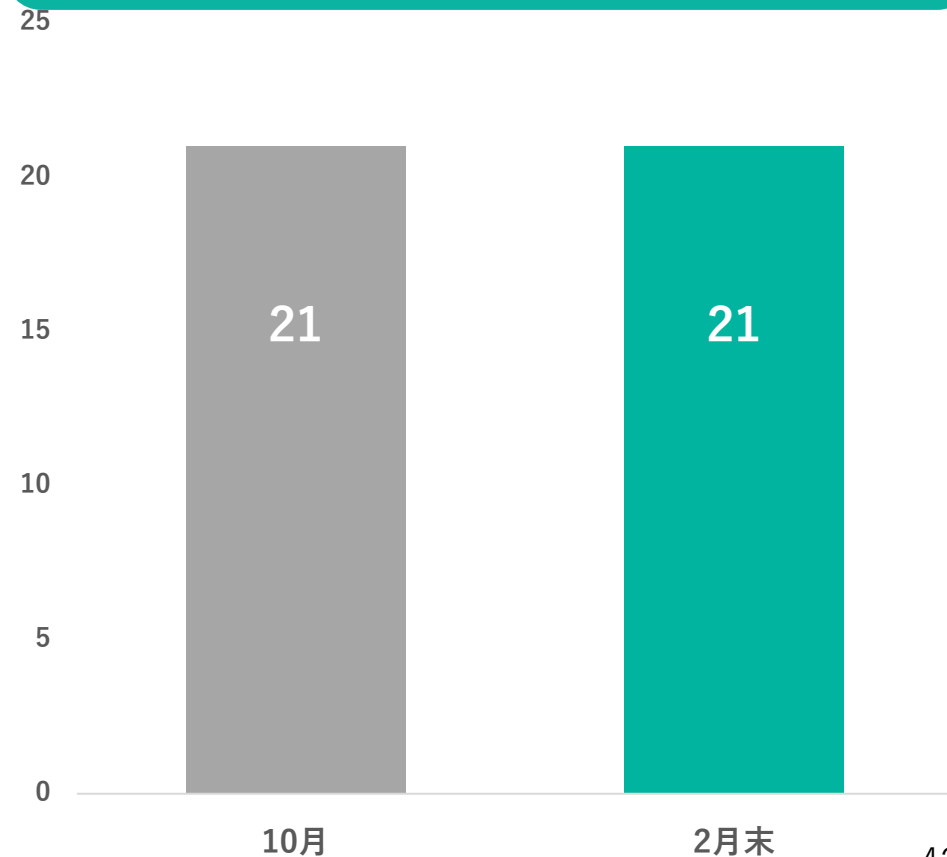


他人に自分から話しかけて対話を始めるなど、社会生活に必要と考えられる初歩的なスキルをはじめ**3領域すべてで数値が向上した**。夜間中学に登校し、**人と話す環境に身を置いたことの影響があると推察**される。一方、自尊感情の数値に変化はなかった。集団の中でまとまった時間を過ごすことで、**他の生徒よりも学習面・コミュニケーション面で自分が劣っていると感じやすかったのではないかと考えられる。**

Kiss-18

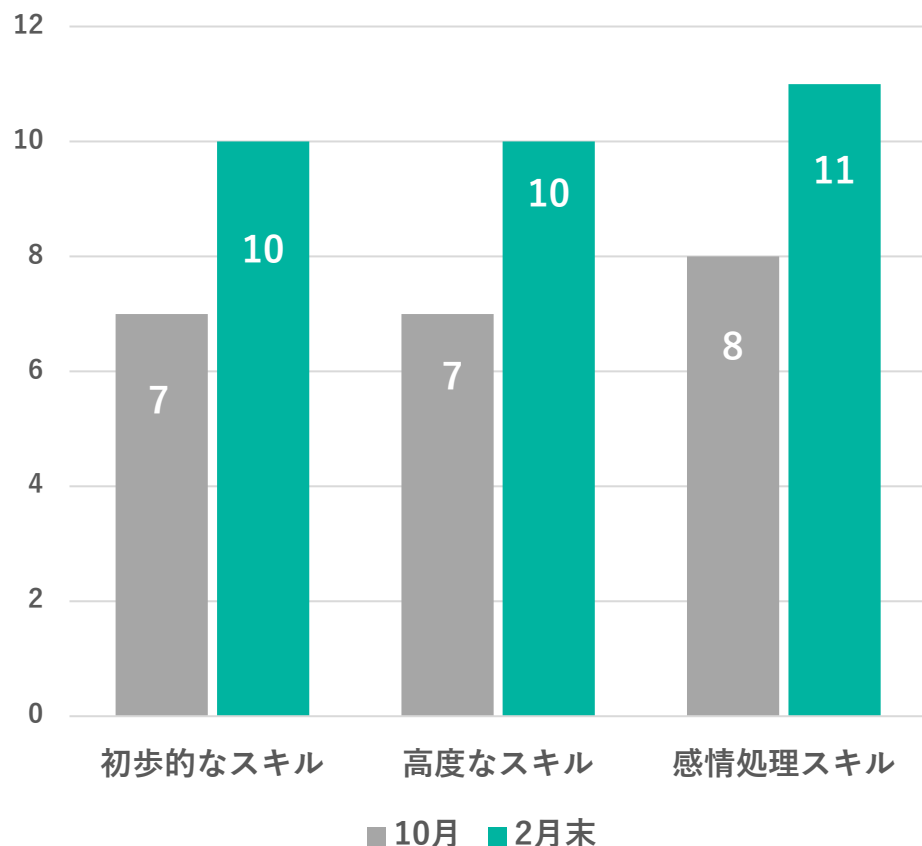


自尊感情

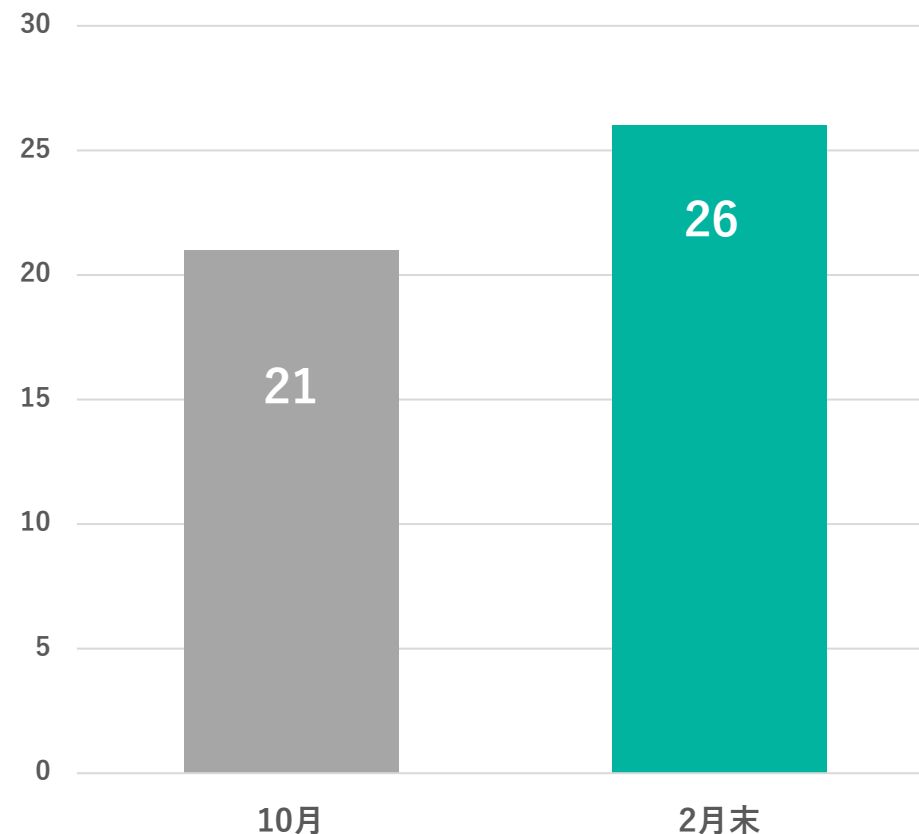


授業中などにも積極的に発言する姿が頻繁に観察され、社会的スキルに関する3つの領域や自尊感情においても数値が向上した。夜間中学への登校によって他の生徒との対話の量が増えただけなく、**多様な年代やルーツの生徒に対して話し方なども工夫**するなど質的な変化もみられ、社会性が身に付いたとものと見受けられる。

## Kiss-18



## 自尊感情

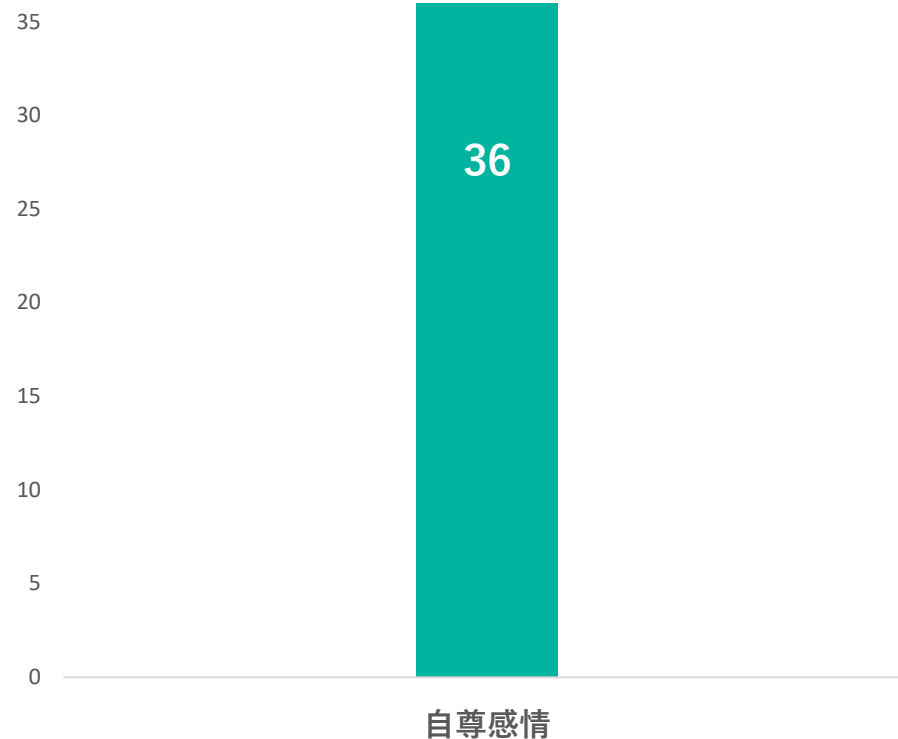
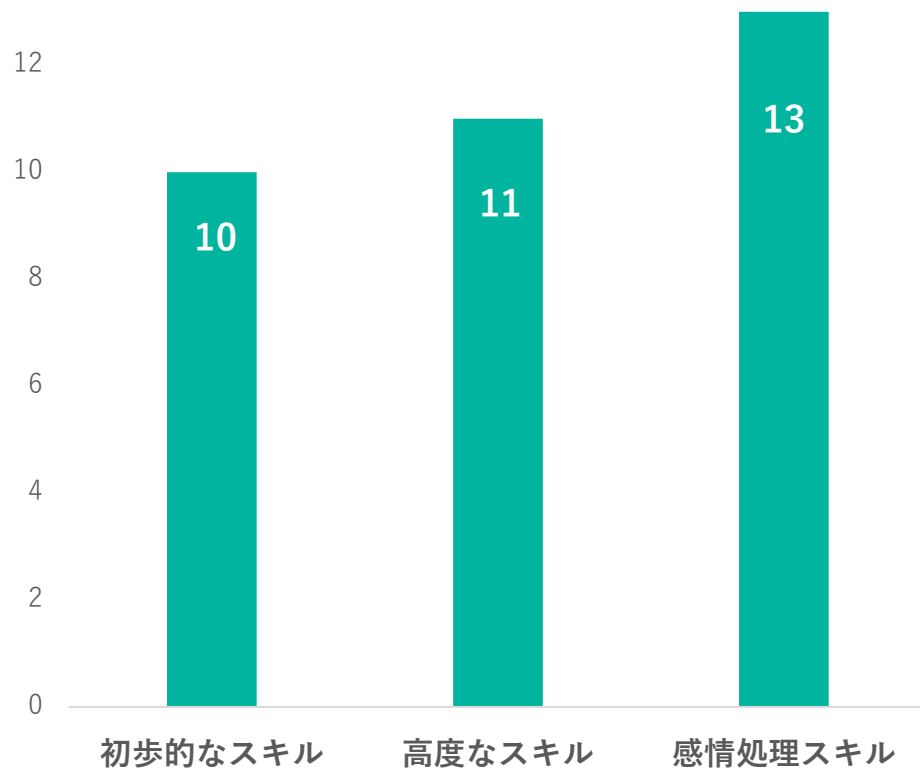


Cさんは在籍校の授業等には通えていなかったが、定期的に先生との面談に赴いたり、教育支援センター等に通っていたりするなど人とのつながりがあるため、もともと全体的に高い数値を記録した。

## Kiss-18

## 自尊感情

（利用が1月からのため比較無）

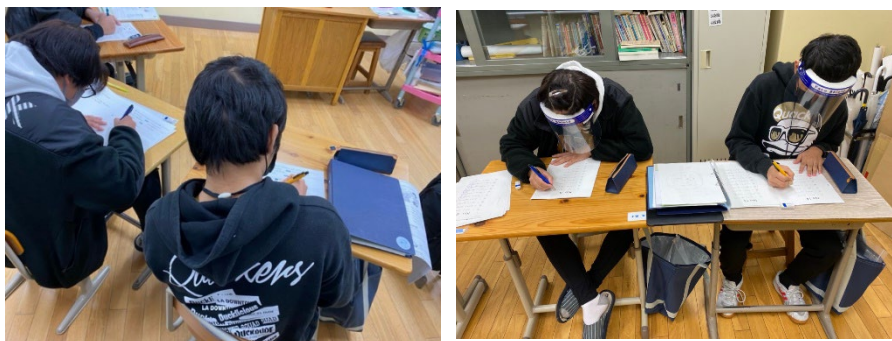


■ 2月上旬

■ 2月上旬

不登校状態だった支援対象者が、支援計画コーディネーターや学習サポーターと一緒に**教室**内で授業を受けることに慣れ、**テストで成果を実感できる喜び**などを経験した。

## 授業の様子



▲授業を受けている様子

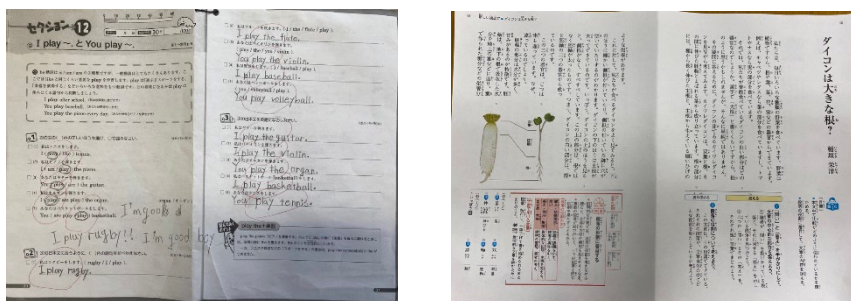
## 支援計画コーディネーターの学習伴走の様子



▲学習介入をしている様子

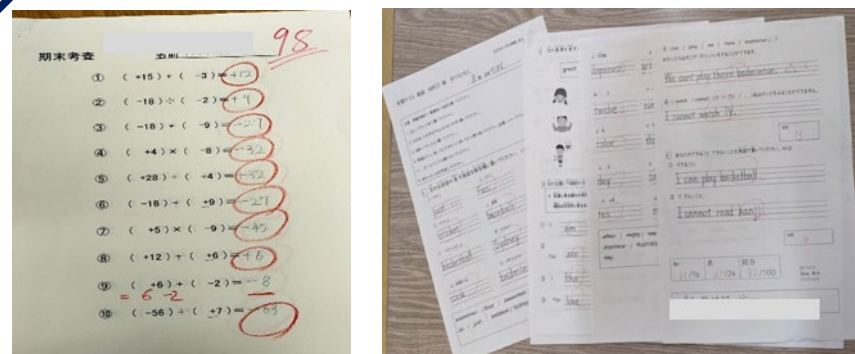
学習関連

## プリント関連



▲先生が準備してくれたプリントを授業で使用した

## 期末テスト



▲期末テストの結果98点

▲期末テストの結果82点

成果

# 授業や学校生活での様子 (学びの場の先進事例の創出)

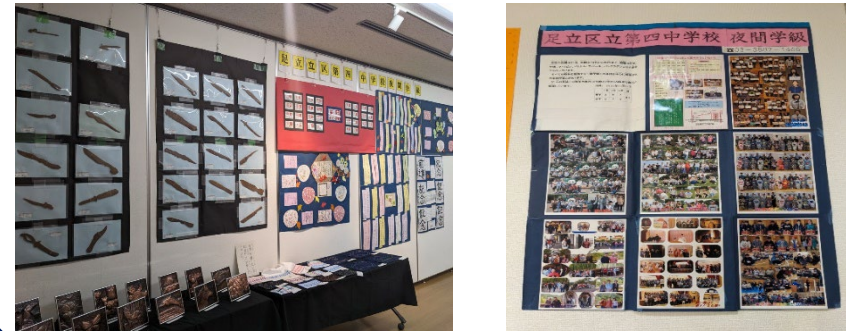
給食や社会科見学等の授業外の時間でも、**年齢や国籍等が多様な夜間中学の他の生徒の皆さんとの交流**が生まれ、**夜間中学への登校動機が維持**された。

## 給食



▲給食を食べる様子

## 社会科見学 (葛飾区文化施設)

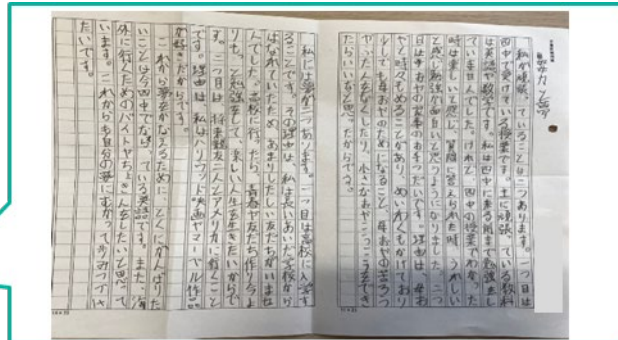


▲夜間中学合同作品展の見学

多様な機会  
の体験

## スピーチコンテスト

自分の将来の目標や、現在頑張っていることを一般クラス全員 (約20名) の前で発表した。



## 美術での制作物



▲授業での作成物

## 事業課題 (学びの場の先進事例)

### 事業課題

不登校状態の学齢生徒の**夜間中学への継続的な登校が実現**したことで、支援対象者の**大きな成長がみられた**一方で、長期的に不登校状態だった生徒特有の課題が顕著に現れるようになり、**ステークホルダーの協力体制や応援しようという気運の維持が困難**になった。

### 登校維持の課題

#### 1. 登校日数が少ないことで他の生徒と比較して多様な面での差が表出し、自己肯定感を醸成しづらい一面もある

「学びたい」という意欲と確たる目標をもって夜間中学に登校している生徒と比べ、不登校状態の支援対象者は「(在籍校の同級生たちのように自分も)学校に通いたい、学校生活というものを送りたい」という意識が強く、心構えが違う。そのため**学習量や授業に臨む姿勢などさまざまな面で差が生じやすく、時には高いハードルに向き合わされる**。また、不登校期間の影響により、忘れ物をしたり作業スピードが周囲の生徒の合わせられない場面も散見された。

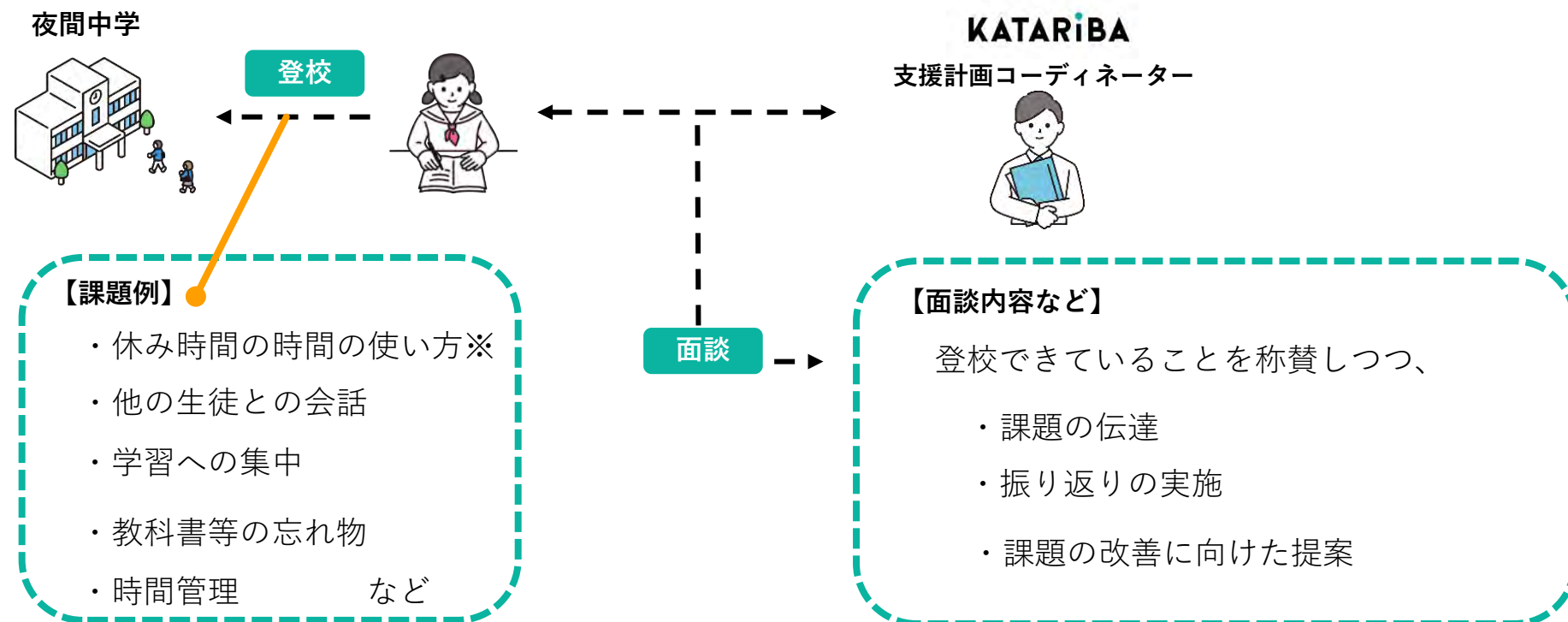
### 出口支援課題

#### 2. 「朝型の生活習慣」を取り戻す目的には適さない

夜間中学への登校は、夜の時間帯での活動であり「朝型の生活習慣」を取り戻す前提の支援ではない。そのため、**昼間に通う教育支援センターや在籍校の授業に戻るステップには直結しない可能性**がある。

### 3. 幅広い知見や高度なスキルが要求される支援計画コーディネーターの採用と育成を仕組み化することの困難

実施内容 (p.21~31) のとおり、準備期間から登校のサポート、授業中の伴走など、支援計画コーディネーターの役割は多岐にわたる。さらに、「登校維持の課題」で述べたとおり、夜間中学の授業への一部参加は必ずしも支援対象者の自己肯定感を上げるだけではない性質を含むため、支援対象者の頑張りを称賛しつつ、課題に対しても適宜フィードバックをして、改善方法を一緒に検討する面談を行うことが重要である。支援計画コーディネーターにふさわしい人材の採用や育成をどこでどの機関が担うのが事業展開をしていくうえで大きな検討課題の一つである。



(※) 休み時間中にお手洗いを済ませる、教科書などの準備、給食準備の手伝い、移動教室の準備など

## 4. 不登校支援の一環としての「夜間中学への通学」に適した支援対象者に接続する際の難しさ

夜間中学への通学を継続するには本人の覚悟と手厚いサポートが必要であり、本事業から想定される支援対象者のターゲットとなる生徒像は以下に設定できる。「朝早く起きる必要はない」「授業料が基本かからない」といった利点に注目するのではなく、**意欲があるかが極めて重要**である。

### <学習面>

- ・ 戻り学習をしたい
- ・ 苦手教科にも取り組める
- ・ 宿題やテストに取り組める

### <対人関係面>

- ・ 人と話したい
- ・ 多様な人を尊重できる

### <学校生活面>

- ・ 集団で活動する意欲がある
- ・ 学校行事への参加意欲がある
- ・ 給食などの参加する意欲がある

### <その他>

- ・ 夜の時間帯に外出、登校できる
- ・ 学校のルールを守ろうとする意志がある
- ・ 学校にいきたいという思いがある

学齢生徒



### その他

- ・ 保護者の協力